

Ⅲ 調査結果のまとめ（平成24年度）

1 総合的にみた結果

- 昭和60年代と比べて、全体的に低い状況にある。
- 学年が進むにつれて、全国平均を上回る項目が増加する。

- 総合判定結果（A～Eの5段階）では、男子は年齢が進むにつれてA判定の児童生徒が増える傾向にあるが、女子では小学校高学年以降A判定の割合に大きな変化はない。
- 総合判定結果のE判定については、男女とも小1が最も高く、高3が最も低い値である。学年が進むにつれて、E判定の児童生徒が減少する傾向にある。
- 高等学校（定時制）では、男女ともA判定の生徒が少なく、女子生徒のE判定の割合が極めて高くなっている。

（1）平均値の年次推移（H16～H24）から（資料P.52～60参照）

- 「上体起こし」「長座体前屈」「50m走」では、緩やかな上昇傾向にある。
- 「上体起こし」では、全ての年齢において上昇傾向が見られる。特に、中学校3年生以上の女子における上昇傾向が著しい。
- 「長座体前屈」では、中学校の男子と女子の多くの年齢において上昇傾向が見られる。
- 「50m走」では、小学校低学年を除く全ての年代の男子において、上昇傾向が見られる。
- 「握力」「ボール投げ」について、緩やかな下降傾向にある。
- 「握力」では、小学校低学年を除く全ての年齢において下降傾向が見られる。
- 「ボール投げ」では、特に小学校での下降傾向が大きい。

（2）昭和60年代との比較から（資料P.61～64参照）

- 全体的に、昭和60年代の水準より低いものの、回復傾向にある。
- 男子の「50m走（中3、高3）」「ボール投げ（中3）」、女子の「50m走（中3）」では、昭和60年代とほぼ同等である。
- 男子の「50m走（中3）」においては、今年度の数値が昭和60年代の数値を上回っている。（昭和60年：7.6秒 → 平成24年：7.5秒）
- 女子の「持久走（中3、高3）」「ボール投げ（小6、中3、高3）」は、昭和60年代の水準から下降傾向にある。

2 全国平均との比較

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」（小5・中2）との比較

全国平均を上回る項目の割合

小学校	約50%（8項目／全16項目）
中学校	約67%（12項目／全18項目）

- 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」（小5・中2）との比較では、小学校では約50%、中学校では約67%と、小学校よりも中学校が全国平均を上回る項目数が多い。
- 「50m走」「立ち幅跳び」「ボール投げ」の3項目は、小5、中2ともに全国平均を上回っている。
- 「握力」については小5、中2とも全国平均を下回っている。「上体起こし」「20mシャトルラン」では、中2（男子）以外で全国平均を下回っている。

「体力・運動能力調査」（6歳～79歳）との比較

全国平均を上回る項目の割合

小学校	約22%（21項目／全96項目）
中学校	約28%（15項目／全54項目）
高校（全）	100%（54項目／全54項目）
高校（定）	約24%（17項目／全72項目）

- 「体力・運動能力調査」（6歳～79歳）との比較では、全国平均と同等か上回っている項目の割合が、高等学校で100%と高い値を示している。中学校では約28%、小学校では約22%の項目が全国平均と同等か上回っている状況である。
- 小・中学校の男女とも、「握力」「20mシャトルラン」「持久走」で全国平均を大きく下回っている。

【参考】「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」（小5・中2）

体力テスト合計点平均の全国順位

小5（男子）	13位、	小5（女子）	21位
中2（男子）	10位	中2（女子）	19位

3 校種別にみた結果

<小学校>

- 「立ち幅跳び」「長座体前屈」「反復横とび」が、多くの学年で全国平均に近い値を示している。
- 総合判定では、男女とも学年が進むにつれて、A、Bの判定が増え、D、Eの判定が減少している。
- 「握力」「20mシャトルラン」が、全国平均より低い値を示している。
- 年次推移をみると、「ソフトボール投げ」では、男女とも低下傾向にある。

<中学校>

- 「長座体前屈」が、全国平均より高い値を示している。
- 「50m走」「ハンドボール投げ」が、多くの学年で全国平均に近い値を示している。
- 総合判定では、男女とも中3のA判定の割合が高く、男子で約19%、女子で約29%となっている。

- 「持久走」の値が低く、「20mシャトルラン」についても中3男子以外の値が低い。
- 総合判定では、女子においてD、Eの判定が学年を追うごとに増加しており、体力が高い生徒とそうでない生徒の2極化の傾向が表れている。

<高等学校（全日制）>

- 全ての項目において、全国平均と同等か高い値を示している。
- 「反復横とび」「20mシャトルラン」が、ここ数年上昇傾向にある。
- 総合判定では、学年が進むにつれて男子のA判定が多くなり、高3男子ではA判定の割合が約38%と全学年で最も高い値を示している。
- 男女とも全国平均より高い値を示しているが、「握力」ではここ数年低下傾向が見られる。
- 昭和60年と比べ、他の年代より体力が低下している傾向が見られる。

<高等学校（定時制）>

- 「長座体前屈」「上体起こし」が高い値を示している。
- 学年が進むにつれ、全国平均より低い値となる傾向がある。
- 高4女子では、E判定の生徒が48%と最も高くなっており、男子と比較して女子のE判定が高くなっている。

3 本県の体力状況と指導の方向（考察）

- (1) 小学生の段階から、「柔軟性」「敏捷性」の項目が優れており、素早く巧みに動くことができる児童が多いと言える。小学生は、この時期に特に高めたい「体の柔らかさ」「巧みな動き」を身に付けていると判断できる。
- (2) 全国平均を上回る項目の割合は、小学校、中学校、高等学校と、学年が進むにしたがって増える傾向が定着している。今後、小学校において、休み時間の運動遊びや学校としての体力向上の取組を充実させることで、中学校、高等学校の体力向上を一層図ることができる。
- (3) 小・中学校、高校を含め、男女とも多くの学年の「握力」が、全国平均を下回る傾向がここ数年見られる。また、中学校、高等学校の女子に体力に優れる者とそうでない者との2極化の傾向が見られることから、保健体育の授業や部活動の時間における運動量の確保が求められている。
- (4) 「握力」「ボール投げ」の項目で、体力の低下傾向が見られることから、全身の筋力アップを図るトレーニングやボールを使った運動を工夫し、重点的に取り組む必要がある。
- (5) 高等学校では、同じ年代であっても全日制と定時制との体力差が大きいことが特徴である。とりわけ、D、E判定の生徒に対する継続的な個別指導が必要である。

IV 今後の取組

1 教科の体育の授業はもとより、日常生活における運動実践の場を充実させる

- (1) 自ら進んで運動を実践する習慣を身に付けることができるようにするため、運動の機会（休み時間や児童会活動、部活動など）を確保する。
- (2) 小学校では、仲間とともに楽しみながら多様な運動経験をすることに重点を置き、教科体育では「体づくり運動」を一層充実させるとともに、体育的行事等との関連を図った日常的な運動実践の場の充実を図る。
- (3) 中学校及び高等学校では、小学校の取組に加え、教科体育では「体育理論」で運動に対する理解を深めるとともに、運動部活動において効率的な運動ができるよう、運営方法や指導方法を工夫する。

2 運動に親しむ資質や能力を育て、体力の向上を図る

- (1) 児童生徒の発達の段階と運動の特性を踏まえ、児童生徒が運動技能を身に付け、仲間と一緒に運動する楽しさや喜びを味わうことができるようにする。
- (2) 「チャレンジスポーツ in ぎふ」を活用するなどして、児童生徒の発達の段階に即した適切な運動の機会を計画的・継続的に位置付け、体力の向上を図るようにする。

3 体力が低い児童への個別指導の充実を図る

- (1) 体力状況の二極化傾向と、体力が低い児童生徒の固定化傾向に対応して、全校的な取組の充実と共に、継続的な個別指導についても充実を図る。

参 考

〈テスト項目と体力評価〉

テスト項目	体力評価	テスト項目	体力評価
握力	筋力	シャトルラン又は持久走	全身持久力
上体起こし	筋力・筋持久力	50m走	スピード・走能力
長座体前屈	柔軟性	立ち幅とび	筋パワー
反復横とび	敏捷性	ボール投げ	筋パワー・投能力・巧緻性

〈標準偏差（SD）〉

標準偏差とは、平均値を基準にして、集団の散らばり具合を示す度合いである。標準偏差が大きい場合は、その集団の散らばりが大きく異質集団であるといえる。その反対に標準偏差が小さい場合は、集団の散らばりが小さく等質集団であるといえる。

〈Tスコア〉

個人の記録を比較し、集団の中で相対的な位置を知ろうとする場合、異種目の比較や同一種目であっても異単位な場合の比較が可能な方法が必要である。その代表的な方法がTスコアである。

Tスコアは、集団の平均を50点とし、そこから標準偏差の1倍離れたものを40点と60点に、2倍離れたものを30点と70点に換算した数値である。